

EVRI

教育ビジョン研究センター

ISSN-L(PRINT):2435-8134 ISSN(ONLINE): 2435-8037

EVRI研究プロジェクト叢書 Vol.2

Bulletin of the EVRI Research Project (Vol. 2)

教師教育者のための 国際版授業研究マニュアル

Lesson Study Manual for Teacher Educators International Edition



はじめに

－本マニュアルの刊行の趣旨と経緯－

本書に関しては、おそらく以下のような素朴な疑問が寄せられるだろう。

- なぜ日本語、英語、スペイン語の3言語で、授業研究のマニュアルを作ったのか？
- なぜマニュアル中に掲載されている写真は、日本の光景ではないのか？
- なぜ教育ビジョン研究センター（EVRI）が、2015年3月に出版された授業研究マニュアルを、5年以上経過した2020年6月に再出版したのか？

これらの問いに対する答えの大半は、22頁の「おわりに」に記載されている。ここでは、筆者なりの答えを追記することで、序文に代えたい。

広島大学は、2010年4月から2016年3月にかけてドミニカ共和国・サントドミンゴ自治大学の教育科学部のFaculty Developmentを支援した。筆者は、広大側のプロジェクトメンバーの、文字どおり末席を汚していた。当時語られていた私たちの問題意識を再現しよう。「本当はドミニカの教育改革に直接的に貢献したいが、それは時間的にも資金的にも人員的にも難しい。そこで広島大学の歴史と強みを活かし、良い教師を育てる良い教師教育者の専門性開発を当面の目標に掲げることで、間接的にその目的を達成したい（現地教育の改善は、現地の教師教育者が自律的に行うべきだ）。その目的を達成する手段として、授業研究を導入する。授業研究を通して、新設された教育科学部の構成員に同僚意識が形成されるとともに、大学と初等中等教育の授業の質向上に関心が向いてほしい。」

最終的には、サントドミンゴ自治大学側で授業研究のすそ野を自律的に広げてもらうために、授業研究マニュアルが作成された。これは、研究交流の成果物も兼ねていた。オリジナルは日本語で作成され、スペイン語と英語に翻訳された。スペイン語版には、南米各国で授業研究を立ち上げる際のスタートキットとなることも期待されていた。

しかし、3言語で作成された授業研究マニュアルは、プロジェクトの終結で普及の機会を逸し、人知れず塩漬けとなっていた。このようなマニュアルを、いまEVRIで再出版するに至ったのは、次のような理由からである。1つは、専門分野を異にする教員が協働して作り上げた貴重な成果物を形に残しておきたいという思い。もう1つは、EVRIが海外の研究者・実践家と交流する過程で、授業研究について知りたいというニーズに何度と接したが、そのたびにコンパクトに整理された資料が少なく苦労した経験である。

幸い思いを同じくしていた執筆者の了解が得られ、再公開が実現した。この試みに賛同していただいた全ての方々、とくにプロジェクトリーダーの棚橋健治先生に感謝申し上げる。このマニュアルがさらに研究・活用され、改訂版が刊行されることを切に願っている。

広島大学教育ビジョン研究センター(EVRI)
センター長 草原 和博

目次

はじめに

1. 授業研究への誘い — 本マニュアルの構成と見方 —	1
2. なぜ教師教育者に授業研究が必要なのか	3
3. 授業研究の手順	5
ステップ1 授業研究の組織を作る	5
ステップ2 事前協議会を行う	7
ステップ3 研究授業を実施し、観察する	11
ステップ4 事後協議会を行う	15
ステップ5 自分の授業を見直し、改善していく	19
ステップ6 授業研究の仲間を増やし、広げる	20
4. おわりに	22
5. よくあるQ&A	23
執筆者・翻訳者一覧	27

1. 授業研究への誘い 一本マニュアルの構成と見方

この「授業研究入門マニュアル」は、師範学校や大学等の高等教育機関で教員養成に携わっている教師教育者の皆さんに、教員養成の質向上や現職教員の授業改善の一つの方法として「授業研究」を紹介するものである。

授業研究それ自体はシンプルな活動である。「授業を計画する」「授業を行う」「行った授業の反省をする」「反省を次の授業に生かす」という、普段行っている教師としての自身の仕事を、一人ではなく周囲にいる同僚教師とともに行う活動である。この「同僚教師と行う」ことが授業研究の特徴だと言える。さらに授業研究の大きな特徴は、「授業を研究対象にして研究する」ということにある。授業研究 (Lesson Study, Estudio de Clases) の「研究 Study, Estudio」は、「Investigate, Investigar」の意味である。この「同僚とともに行う」「授業を研究する」ことで得られる効果は大きく三点ある。一つ目は自分の授業の改善ができること、二つ目は今ある授業よりも更により授業をつくるために新たな方略や授業技術、カリキュラムの開発がされること、三点目にその国の教育の基盤を成す教師文化をつくり、学校や学部としてのまとまり (共同体) を創出することである。それら効果を生み出す方法の総体が「授業研究」である。

本書は授業研究を試してみようと思われる先生方のニーズに合うように作成された。ニーズは各先生方によって異なるだろう。本書では大きく、授業研究を初めて行う先生、数回の経験がある先生、授業研究を深く知りたい先生、の3タイプを想定した。この3タイプの先生方に共通して参照してほしいのが第3章「具体的な手順」である。具体的な手順は「6つのステップ」で構成される。6つのステップが授業研究の一通りの流れを示す、と考えてもらえればよい。それぞれのステップはさらに具体的な活動一つ一つから構成される。この具体的な活動が「キー・ポイント」である。キー・ポイントはそのステップがもつ目的を達成するための活動チェックリストとしても使うことができる。

各ステップは見開きで構成されている。キー・ポイントが左右の頁に配置され、その中でも重要な用語や概念が「解説」コーナーで説明されている。

それでは、具体的にどのページから本書を読んでいけばいいのだろうか。

もしあなたが「授業研究」という言葉を初めて聞くのであれば、まずは経験してみよう。お勧めは、第3章「具体的な手順」のステップ1から6の「キー・ポイント」である。ステップ1から6は授業研究の基本的な順番を示しており、その中のキー・ポイントは各ステップで教師が実施する際に行う活動、工夫や留意している点である。

ステップ1は授業研究の準備体操にあたる。授業研究は一人で行うものではなく同僚教師とともに行うものなので、このステップ1は大切である。最初は何よりもステップ1を読んで挑戦してほしい。そしてステップ1を体験し、そのまま続けて実践できそうだと判断したら、ステップ2からステップ5へ移ってほしい。

ステップ2は「授業を計画する」ことにあたる。ステップ3は「授業を行う」ことにあたる。ステップ4は「行った授業の反省をする」ことにあたる。そしてステップ5は「反省し、次の授業に生かす」ことにあたる。これらステップ2から5は、毎日の授業において、それぞれの方法で行われていることだろう。それを同僚教員とともに一定の形式に沿って行うことが授業研究である。ステップ5まで移ったら、時機をみてステップ2に戻ってほしい。そして2, 3回ステップ2から5を経験したら、ステップ6に移ってみてほしい。ステップ6は「授業研究の仲間」を増やすことに

あたる。仲間を増やしたら、またステップ2に続いていく。まずはやってみること、授業研究を体験してみてください。

もしあなたが、すでに同僚教師の授業を観察した経験があったり、ご自身の授業を公開した経験があったら、第3章「具体的な手順」のステップごとにある「解説」も読んでみてほしい。キー・ポイントで示される活動がどのような意図をもっているかの理解を助け、活動の質が深まっていくだろう。もし授業研究を実際に行う前や、行っている間に疑問が起きたら、第5章「よくあるQ&A」を参照してほしい。これまで日本以外の各国の先生方から寄せられてきた授業研究に関する質問に答えている。

もしあなたが授業研究をもっと深く知りたい、工夫したい場合は、第3章の各ステップ後にある「コラム」と第1章を読んでほしい。授業研究のステップやキー・ポイントを支える技術や背景にある思想、信念を記している。ご自身が生きる国、教育文化の中で培ってきた理念等と比較しながら読んでほしい。この部分は私たち日本の教育の歴史の中で育まれた技術、思想、理念が含まれている。必ずしも各国の実情や学校の文脈、各教師が置かれているすべての状況に合致するわけではない。ただし授業研究を理解する一助となる。

本書を読んで実際に授業研究を進めていくと、どんどん疑問が沸き起こってくるだろう。ご自身が勤める機関や国の文脈にどのように合わせるかについて悩むかもしれない。本書の中でそれら疑問への答えが見つければ幸いだが、見つからなくともがっかりしないでほしい。本書の中に答えが見つからないということは、皆さんの手による自身の授業研究を生み出しつつあるという証といえる。

第4章「おわりに」には、本書の作成経緯と、作成に込めた私たちのメッセージを表わした。第4章で述べているように、本書は「投げ棄てられるべき梯子」である。日々よい教育について考え実行し続ける教師を育てる教師教育者を目指し自分自身が成長すること、その目的への足がかりの役目を持つ。本書は、登る途中で折れないような、頑丈な梯子とするように努めて作成された。一段ずつ変わっていく風景を楽しんでいってもらえるよう、その余裕を作れる頑丈な梯子となることも目指した。しかし、本書で紹介している授業研究の理念やスタイルに過度にとらわれないようにしてほしい。理念は参考にしても、それぞれの地域や人々の社会・文化的文脈やその可変性に応じ、授業研究のカタチを再構築していくことを期待する。本書は授業研究の原則を抽出するようには努めているが、決して固定的絶対的な「マニュアル」としては読まないでほしい。

それでは、授業研究という梯子に足をかけ、登っていきましょう！

2. なぜ教師教育者に授業研究が必要なのか

よりよい授業を求めて、学び合う教師の輪を広げていくために

何のために教師は授業をするのか。子どもを育てるためである。子どもが成長してこそ、授業は意義をもつ。わからなかったことがわかるようになったとき、子どもは元気になってくる。反対に、わからない授業が続いたとき、子どもの瞳は輝きを失ってくる。

よりよい授業ができる教師を育てることが、教師教育の目的であり、役割である。よりよい教師を育てる教師教育が、将来的には子どもの成長につながっていくことになる。

けれども、よりよい教師を育てたから、その教師は必ずよい授業ができるというものではない。よい授業ができるのは、教師が「どうすればよりよい授業ができるのか」と悩んだ末のことである。「どうすれば自身の授業の問題点を克服し、改善していくことができるのか」と苦闘し続けた結果として、よい授業が実践できるのである。「どれだけ悩んでも、よりよい授業をして、子どもの成長につなげたい」と考える教師を育てることが、教師教育には肝要である。

少し考察を深めてみよう。授業は「何のために、何を、どのように教えるのか」と考えて実践される。学習の方法は何らかの内容を学ぶための方法であり、授業の目標・内容・方法は密接に結びついている。したがって、よりよい授業を実践しようと授業の方法の改善を図ることは、授業の内容（カリキュラム）の改善のみならず、授業の目標の考察にもつながってくる。そこで求められるのが、目標・内容・方法が整合した授業づくりであるが、授業の成否を実践者自身が見極めることは容易ではない。

ほとんどの教師が「どうすればよりよい授業をすることができるのか」という問題意識を持っている。けれども、教師にはそれぞれに個性があり、こだわりがある。教える内容の広がりや深さにこだわる教師もいれば、教材や学習材のわかりやすさにこだわる教師もいる。教え方にこだわる教師もいれば、子どもの学び方にこだわる教師もいる。そこで、教師が集まって、互いの授業をよりよくするために意見を出し合う。それぞれが授業を公開し合って、検討し合う。こうした営みが授業研究である。日本では、半世紀以上前から教師が自主的にグループを形成して授業研究の営みを重ねてきた。

さて、毎日のように授業を実践していても、ここに述べたような授業研究の要点を理解している教師は意外に少ないものである。どれだけ苦闘しても、よりよい授業ができるようにならない理由の一つがここにある。けれども、授業研究を重ねてきた教師教育者が自らの役割として授業研究の要点を伝えていけば、教師が授業に対する建設的な意見を出し合い、授業を改善していくことができるようになる。大学で授業研究の要点を学んだ学生が小・中・高等学校に赴任していけば、授業研究の輪は大きく広がっていく。結果として、授業研究の輪を育む教師教育は、教師の成長を通して子どもの成長に寄与していくことになるのである。

授業研究の場に集まる者は平等であり、授業研究は民主的になされるものである。これが、日本で営まれてきた授業研究の根本理念である。教師教育者も授業研究を通して多くの教師と育み合ってきたし、研究者と実践者の垣根を越えてこそ学び合える。互いの役割を尊重しつつ、学び合っていきたいものである。

よりよい授業を求めて、授業を科学的に研究していくために

学校の教師は専門職であり、生涯にわたって学び続け、その資質・能力の向上を図らなければならない。教師自身が学び続けるから、よい教え子を育てることができる。学び続ける教師をいかに育てるか、現職教師の学び続ける力をいかにつけるか。それが教師教育の重要な課題である。学び続ける教師としての基礎的な資質や能力をつけることが、大学の教員養成の役割である。そのために必要で、有意義なのが授業研究である。

授業研究とは、その名の通り、授業を研究することである。授業を研究するとは、授業の構造を分析し、その授業がそのような展開となる根拠を抽出して、それを評価し、更に改善策を考察することである。それは単なる経験に基づく感覚ではなく、誰もが納得し、共有できる科学的根拠に基づく合理的判断となる科学的な研究でなければならない。

科学的な研究には、共有されるべき方法論がある。それは自然科学でも、人文科学でも、社会科学でも同様である。科学的な研究は、個々の研究者の地道な研究が基本であるが、偉大な成果はただ一人の手によってなされているわけではない。個々の研究者が一定の成果を上げたならば、それを同じ研究者仲間の会に報告し、皆で吟味する。学会や研究会である。その仮説に意味はあるか、その仮説の吟味方法は適切か、その検証で本当に仮説が証明されたと言えるのか、他の者が追試験をしても同じ結果を得られるのか、ほかの仮説は立てられないか。そのような吟味に耐えたものだけが、科学的な研究成果として受け入れられ、広く人々の生活の改善に役立つ様々な形に利用されるようになる。

学校はどうであろうか。教室を、「小さな王国」にたとえることができる場合もあるのではなかろうか。その場合、王様は教師である。王様のすることは絶対で、誰の批判も受けない。教師は一人で授業を考え、実践する。それは個人の価値観、経験、直感などに頼ったものとなりがちで、教師仲間や教師を指導する者たちによる吟味の場はほとんどない。このような教室はないだろうか。授業を計画する、計画した授業を実践する、実践した授業を分析・評価する、評価した授業を改善するということを、個々の教師が一人で行うだけでなく、教師集団として行い、皆で吟味し合うことが、よりよい授業ができる教師を育てることになる。皆で吟味し合うと、自分と異なった授業観や授業の見方・考え方に触れることができる。また、多様な視点から授業を吟味すると、自分一人では見えていなかった授業のよいところや悪いところも見えやすくなる。授業研究の方法論を身につけ、習慣化するためには、大学における教員養成においても、そして既に学校で教壇に立っている現職教員の研修においても、授業研究を積極的に取り入れることが有効である。大学において授業研究を学び、習慣化した学生が教師となることによって、授業研究が学校に根付くならば、授業の質は格段に向上し、社会の将来を担う次世代の育成に大いに寄与するであろう。

そして、大学における教員養成の授業自体も授業研究の対象とすることができる。これは、教員養成の授業の改善につながり、また教員養成を担う大学教員の授業力ならびに授業研究力向上になる。教師教育者自身が自らの授業の改善を続ける場を設定することにより、教師教育者も学び続けることになるだろう。授業研究を含めた教師教育の様々な研究の発展も期待できよう。

3. 授業研究の手順

ステップ1 授業研究の組織を作る

■ キー・ポイント

- (1) 授業で悩んでいる—最初は気軽に話ができる—仲間を探そう。
- (2) 授業で尊敬できる—できたら上手いと噂の—仲間を探そう。
- (3) (1) と (2) の仲間でスタディ・グループをつくらう。目的は、もっといい授業ができることで、「自分」も「学生・生徒」も成長するために。
- (4) まずは、思いついたときに、仲間で互いに授業を見せ合おう。

解説 授業研究とは何か

授業は、子どもを育てる営みである。よりよい授業をしてこそ、子どもは成長する。わからなかったことがわかるようになった時、自ら学習しようとする意欲も高まってくる。そうした子どもたちが、将来の地域や国家、地球を支えていく人材となるのである。

よりよい授業をするにはどうすればよいか。教師が授業を公開し、互いに批判し合い、知恵を出し合う場が授業研究である。子どもの成長のために、よりよい教師を育てるために、授業研究の質を高め、授業研究の輪を広げていくことに貢献していくことが教師教育の大きな役割である。

解説 同僚と共働することの大切さ

師範学校や大学の教員養成学部では、多くの場合、専門の異なる複数の教師教育者で教師を育てている。だから、教師教育者は、自分一人がよい授業をすれば、よい教師が育つなどと思ってはならない。一人の教師教育者にできることは限られている。学生はどの先生の授業が優れていて、どの先生の授業がそうでないかを知っている。先生の言うことがバラバラであれば、戸惑うことにもなる。仲間と授業を見せ合って改善点を出し合えば、誰もがよりよい授業を提供でき、さらに、共有された目的に向けて協力して教育することができるようになる。



仲間と「よい授業」イメージを話し合う。

- (5) 機が熟したら、日時や曜日を決めて定期的に授業を見せ合おう。
- (6) 授業を見たら、「技」を盗もう。最初はこっそりと。次第に声に出して、盗んだモノを告白しよう。
- (7) 技だけでなく、そのバックにある「思想・理念」（なぜそういうことをしているのか）も考えよう。
- (8) 受け取るだけでなく、フィードバックもしてあげよう。相手が喜ぶように、互恵的な関係を築こう。

解説 「技」、「思想・理念」とは

他者の授業から学べることは、2つの次元に分類できる。

一つは、目に見えるハウツウの次元。例えば、どこに机を配置し、どのように学生に対話をさせ、いかにICTを活用するかなど。特定の科目に限定されない、一般的な指導上の「技」と言い換えてもよい。上手い教師のそれを真似るだけでも、即効性が期待できる。

もう一つは、不可視な哲学の次元。例えば、なぜAとBという概念を軸にカリキュラムをつくっているのか、なぜ学生にこんなテーマで発表させるのかなど。尊敬できる教師が追求する指導上の「思想・理念」は、自己のそれを省察し、再構築していく上で参考になる。



観た授業について意見交換する。

ステップ2 事前協議会を行う

■ キー・ポイント

- (1) 授業を見せ合う関係ができれば、オフィシャルな研究授業を決行する準備をしよう。
- (2) 最初の授業者を決めよう。組織の長やグループのまとめ役が率先して手を挙げよう。
- (3) 研究授業の前に、事前協議会の機会を設けよう。司会者は授業者自身でも可能だし、仲間内のローテーションで決めてもよい。
- (4) 授業プランを作ろう。そのときは普段できないことに挑戦してみよう。

解説 研究授業とは何か

授業研究の一環として行われる授業を研究授業（research lesson）と言う。研究授業は、授業者が単独で行うだけでなく、同僚などが観察し、それについて一緒に協議することが大切である。そのため、研究授業を行う前に授業プランを作成し、それを事前に配付することによって、研究授業の位置づけやねらい、工夫点などを観察者に理解してもらう必要がある。研究授業には、指導内容や方法など、何らかの提案があるとよい。そのことを研究授業で検証したり、授業後に同僚と協議したりして、授業改善につなげよう。

解説 授業プランとは何か、どう作るか

授業プランとは、一つの授業において、何のために（目標）、何を（内容）、どのように（方法）教え、どのように評価するか（評価）についての計画を記したものである。授業プランを見ればその授業の全体がイメージできるように、具体的に書く。

① 授業の目標

授業で達成したい目標を明確にする。〇〇をすることを通して△△する能力を育成する、というように具体的なイメージで授業目標を設定する。

② それを達成する手続き、方法

授業目標を達成するために必要な内容を精選する。教える内容に適した方法を選び、計画に記入する。例えば、「授業の検討をすることを通して、授業評価力を育成する」がその授業の目標であれば、小中高等学校での授業録画を使った授業評価や、学生による模擬授業とその批評会などの方法を、授業に組み入れるよう計画する。こうした提案性のある取り組みを入れておくと、事後協議会が活性化する。

③ 評価の規準

評価の規準は、授業の目標の達成度に基づいて、あらかじめ設定しておく。目標を達成したかどうか評価するための資料を、授業内に集める。何をどこで集めるか、授業プランに書いておく。

- (5) 事前協議会では、授業プランを説明しよう。
- (6) 授業プランは、印刷物やスライドで記録に残して仲間と共有しよう。
- (7) 授業者は、プランの説明に際して授業の目標だけでなく、研究上の意図も強調しよう。
- (8) 観察者は、授業の目標を達成する、もっと効果的な代案を思いついたら、助言してあげよう。批判は、いつも助言とセットで。

解説 事前協議会の運営の仕方

事前協議会までの準備と当日の運営は、一般に次のような手順で行う。

- ① 事前準備
授業者は、授業プランを作成しておく。また、作成した授業プランにもとづき、教材や指導法の吟味・検討をしておく。
- ② 事前協議会（研究授業の説明）
例えば、グループの中の一名が司会をし、授業者はあらかじめ準備しておいた授業プランをもとに、研究授業について説明する。このとき、授業の目標や教材、指導法、工夫点などを詳しく説明することによって、「授業の意図」を明確に示す。
- ③ 事前協議会（授業プラン検討・意見交流）
授業者からの授業提案をもとに、司会者による進行によって、授業プランの検討を行う。具体的には、授業者と参加者が、これから行われる授業について意見交流し、不明な点や修正すべき点などについて話し合う。司会者は、話し合いの内容を整理し、重要な点を抽出するとともに全体で確認する。これが、授業の見どころ（視点）となり、同時に事後協議会における「協議の柱」となる。なお、司会者は、意見交流が「単なる感想の交流」にならないよう留意する必要がある。
- ④ 事前協議会終了後
授業プラン検討の結果を踏まえ、授業者は授業当日までに授業プランを修正する。

コラム

授業と授業研究の構造

授業を見せ合って、スタディ・グループの仲間と互恵的な関係を築けたら、実際に研究授業を準備しよう。授業には構造がある。授業づくりの際には、何のために、何を、どのように学び教えるのか、その構造の整合性や妥当性を吟味していくことになる。しかし、複数の教師がいれば、それぞれが授業で大切だと思っていることも異なる。そこでまず、授業者は、自分が「なぜ」その研究授業を行うのかにこだわって、計画していこう。

ここで「なぜ」を問うことには、二つの意味がある。一つ目は、一連の授業の中で、その研究授業がもつ位置づけを明確にすることである。ある教員養成課程の授業を取り上げて研究授業を行うとすれば、その教育課程全体の中で将来教師となる学生は、どのような資質・能力を身に付けることが期待されているだろうか。目指したい教師像に対して、当該の授業科目はどのように応えようとしているだろうか。その授業科目の全体構成の中で、その研究授業はどのような位置づけをもち、将来教員となる学生にどのような力を付けることを目標にしているだろうか。

二つ目に、学習者の実態に即して、その研究授業がもちうる意味を探っていくことである。教師は、よりよい授業を目指しながら現実の授業とのギャップに悩むものであるが、学習者の実態把握なしに、授業の改善はありえない。教員養成課程の一年生であっても、それまでの学習経験をもとにして、児童・生徒、教材、指導に対する自分なりの見方・考え方をもっている。興味・関心や過去の学習の定着度も様々であろう。多様な学生の実態を踏まえて、将来の教員としての成長を学生に促すよう、授業者は研究授業を計画する。その授業プランは、いわば仮説である。普段はやりたくてもできていなかったことに、挑戦してみよう。学習者の実態と目指す姿を架橋するために、どのような研究上の意図をもって、どのような挑戦や提案ができるだろうか。

このように、授業者は、なぜその研究授業を行うのかを問いながら、その目標・内容・方法を吟味し、研究上の意図を明確にしていく。事前協議会では、単に授業プランを説明するだけではなく、是非、自らの研究上の意図を強調しよう。また、授業者が自らに問うた結果だからこそ、事前検討会の参加者は安易な否定ではなく、敬意をもってコメントするようにしたい。事前検討会の協議結果は、研究授業の見所を示す観察の視点であり、事後協議会の柱となる。授業プランや協議結果等は記録に残しておき、共有と検証に備えていきたい。授業者がしばしば暗黙のものとしている「思想・理念」を表出し、検証にさらすことは、さらなる成長の契機となりうる。

すなわち、ステップ2における研究授業づくりや事前検討会は、ただ日時を決めて実施すればよいというものではない。授業研究になぜ、どのように取り組むのか、その目的や全体の構造をグループで考えながら、ステップ2に取り組んでいこう。

ステップ3 研究授業を実施し、観察する

■ キー・ポイント

- (1) グループのまとめ役は、あらかじめ研究授業の日時、場所、意図を同僚に広報しよう。組織の長にも声をかけるといいよ。
- (2) 授業者は、リラックスして、普段よりも早めに教室に入ろう。学生にはあらかじめ授業研究の意図を伝えておこう。
- (3) 観察者は、かならず紙とペンを持っていこう。
- (4) 観察者は、事前協議会で授業者が強調した授業の目標と研究上の意図を思い出し、授業を注意深く観察しよう。
- (5) 観察者は、たえず授業者に敬意を払おう。



授業のメモをとったり、ビデオをとったりしている様子



学生のグループワークの様子をメモする観察者

解説 授業を観察する視点と方法

授業研究における授業の観察は、よりよい授業を構想したり実践したりするための力量を獲得し向上させていくことにつながるものである。その意味で、観察者は決して「傍観者」ではなく「当事者」であり、授業を観察すること自体が学びの場であると認識しておきたい。そして、多数の観察者が同席するなど普通の授業とは条件や環境が異なる中で、授業者が授業研究のために授業を公開し提案してくれていることに対して、敬意を払うことを忘れないようにしたい。

次に、授業を観察することは、授業が実践される場に行き、そこでただ漠然と、目に入ってくるものを見、耳に入ってくるものを聞くということではない。まず、授業の観察に先だって、授業プランに示されている授業の目標や指導過程、教材、想定されている学習者の反応などを把握しておくことが必要である。その上で、授業者がその授業の目標の達成を目指して、どのような教材を用い、どのような指導や働きかけを具体的にしているか、その事実を捉えていく。同時に、学習者がそうした授業者の指導や働きかけに対して、どのような発言や活動を展開しているかについても、その事実を捉えていく。授業プランとは異なる指導や展開がなされる場合があれば、それについても具体的な事実を捉えていく。観察者が捉えた事実は、必ずノートなどに記録しておく。

また、観察対象となる授業づくりや授業実践について観察者が自分の課題意識を持ち、自分なりに観察のポイントを考えた上で観察に臨むようにしよう。そして、実際に展開される授業実践の具体や事実を捉えつつ、授業展開・指導方法・教材などの有効性と問題点、学習者の学びの深まりや困難性などについて、思考しながら観察していくようにしたい。授業を観察していくなかで、授業後の事後協議会で授業者に尋ねてみる必要があると思ったり、問題点の改善策や代替案が思いついたりすることがあるかもしれない。それらを、具体的な事実とともにメモしておくといよい。そうすれば、事後協議会での検討がより有意義なものとなり、自分自身の学びの成果も大きくなる。

- (6) 記録は、細かく具体的にとろう（誰が、どの場面で、何をした・何を言ったなど）。
- (7) 記録は、授業プランを参照しながらとろう。
- (8) 記録には、カメラやビデオも活用しよう。

解説 授業観察記録のとりかた

授業を観察するとき、授業後の議論において記録を利用するために、観察者は工夫して授業を記録しなければならない。教室には、黑板にかかれた文字や図、教師と学生の発言や行動など、いろいろな情報がある。これらの情報のうち、授業の目標や授業者による研究上の意図という視点にしたがって、授業後の議論のために重要なこと（すなわち、客観的事実）を紙にかく。また、観察しているときに観察者が考えたこと（すなわち、主観的思考）も大切なので、それも紙にかく。

授業後に実りある議論をするために大切なことは、一目で分かるように、これらを分けることである。そのために、たとえば、記録する紙をあらかじめ二つのゾーンにわけたり、色のついたペンを使ったりする方法がある。下のノートは、ある人が日本の算数科授業を観察したときの記録である。

客観的事実	主観的思考
	<p>(時間) 13:15-</p> <p>(教師の発言) 黒 四角を使った問題をときました。 テープを使った図を作りました。</p> <p>(事実の補足) 青 前の授業の復習 似ている点、違う点の指摘</p> <p>(黑板の文字、式) 黒 授業の目標 あなたは、どのような問題をつくりませんか。 $\square \times 7 = 36$ $6 \times \square = 48$</p> <p>(場面の評価) 赤 この目標は、この授業の後半の活動につながらない。</p> <p>(事実の補足) 青 3つの文のできる文章問題をつくる。</p>

図1 授業観察の記録例（算数）

(注) この記録では、3つの色を使っている。黒は客観的事実を、青はその事実の観察者による補足を、赤は観察者による評価や意見を表している。

コラム

観察意図と観察視点

授業観察と授業記録の質は、観察意図と観察視点に依存している。どのような意図をもって、どこに視点を置いて授業を観察し記録するかが、研究授業を観察する際に重要となる。授業観察には体系的で明確な観察意図と観察視点が求められる。なぜなら、授業は複雑な過程をたどるからである。授業者の授業設定上の意図や、本研究授業におけるねらい、教材の選択と配列、学習者の属性や人数、学習者の学習規律や認知的過程など、さまざまな要素・要因から授業過程は構成されている。したがって、授業観察の際には、どこに観察の意図と視点を置くのが重要となる。

授業が複雑な過程であることを前提として、授業観察・分析の視点はさまざまに研究されてきた。とはいえ、一般的に言えば、授業の次のような構造に着目することができるだろう。すなわち、授業における「目標－内容－方法－評価」の構造である。授業観察・分析の際にはまず、研究授業においてどのような目標が設定されているのが重要となる。その上で、その目標を達成するために、どのような教育内容・学習内容が提供されているのが問われることになる。さらに、その目標－内容に即した方法と評価がとられているかどうか問われることになる。「方法－評価」とは例えば、グループ学習やワークシート・メディアといったどのような方法で教授・学習がおこなわれているか、そこでの学習成果がどのように評価されているかを意味する。

観察意図・観察視点は、この「目標－内容－方法－評価」構造のなかのどこかに重点を置いて設定される。「重点を置いて設定される」というのは、どこかに重点をおきながらも、その点は他の諸要素と密接に関係していることが前提となっているからである。例えば、いかにグループでの学び合い・話し合いを有効に機能させるかに意図をもって、研究授業のなかでのグループ学習の展開に視点を置いて授業を観察したとしよう。グループでの学び合いが有効であるかどうかは、グループで学ぶべき内容であるかどうか当然問われることになる。さらに、グループによる学びの成果が学習目標の達成とどう関連しているのか、それをどう評価することができるのが問われることになる。

観察意図と観察視点を明確にして授業観察に望むことによって、授業の観察と記録の目的と方法が明確になる。さらに、明確な観察意図と観察視点があれば、事後協議会でのコメントは単なる印象批評にはとどまらず、授業過程に即した具体的なコメントとなる。しかし、いくつもの視点を一人の観察者が重ねていくことには限界がある。だからこそ、授業観察は複数の目で行われることが重要となる。

ある大学での「教育哲学」の研究授業の観察を紹介しよう。事前協議会では、授業者の授業観や15回の講義構成、そして研究授業の内容と展開が紹介された。協議を経て、授業観察者はそれぞれ、「学習者の学び合いの組織方法」や「授業者のフィードバック」といった観察意図と観察視点を明確にしていた。研究授業の観察では、教室の後ろから授業展開全体を観察する者、学習者のそばで学習過程を観察する者、教室を動き回りながら授業者と学習者を観察する者、文字記録をとる者、写真の記録をとる者とさまざまであった。事後協議会では、それぞれの授業観察者がどのような意図でどのような視点をもって、何を記録し、どのように感じたのが披露された。観察者によって観察意図と観察視点が異なるからこそ、授業を多角的・多面的・複合的に捉えることが可能となったすぐれた事例の一つである。

コラム

授業観察記録のとりかた

ステップ3の「解説」の冒頭でも述べたが、授業観察者は「傍観者」ではない。したがって、学生の成長を願う授業者と同様に、授業観察者にも授業研究をよりよいものにする「当事者」としての意識が必要である。そのために、授業を観察する際に、学生の学習状況や授業者の言動の記録を的確に残しておくことが重要である（客観的事実）。ただし、その記録のとり方についても、観察の視点や方法が様々である。そこで表1のように、記録の視点及びとり方、そして活用例で整理した。

表1 授業観察における記録のとり方の概要

	学生の学習	授業者の言動	教材と教具
記録をとる視点	授業の目標に対して、学生の知識、技能や態度が変容かつ習得できているか。	授業の目標、内容や方法を、学生に的確に伝えることができているか。	授業の目標や内容を身につけるための工夫された教材と教具になっているか。
記録のとり方	学生の学習ノート 写真や動画 インタビューでの録音	授業者の授業プラン 写真や動画 観察者のノート	観察者のノート 写真や動画 授業者の授業プランや資料
記録の活用例	<ul style="list-style-type: none"> アンケート形式にして、5段階評価や自由記述を分析する。 学生をつまづきの様子を写真や動画に残したり、なぜつまづいたのかの理由を聞いたたりして、授業改善のために分析する。 	<ul style="list-style-type: none"> 授業者の授業プランに即して、時系列に授業中の教師行動（とりわけ、授業運営、フィードバックや発問や板書などといった教授技術）を記録して、授業改善に活用する。 協議会にて、授業の動画を視聴しながら、授業者の言動の理由を振り返る。 	<ul style="list-style-type: none"> 自己の授業改善へのヒントとして、教材開発をする資料とする。 授業研究において同僚教員とともに、授業改善のための資料として活用する。

表1から、授業観察の記録のとり方においても様々な視点や内容があることが分かるであろう。しかし、大切なのは、記録をとる際の目的と方法である。つまり、授業観察者が、いかに授業者（自己や同僚教員）や学生の知識や技能の習得状況について、目的意識を持って記録をとるかである。

例えば、ある教科の指導法の授業観察のとり方を紹介しよう。まず、観察者は、授業内容を時系列に客観的事実や主観的考えに基づいて色分けしながらノートを取りつつ、その他にも色々な媒体を利用して分類かつ整理しておくことを勧める。一方、授業における展開の場面で、学生がグループで対話しているときなどは、授業者は意図的に机間指導をしなければならない。その際に、観察者は、授業者の机間指導の軌道をノートに描いたり、指導言語を録音したりしておくことも重要である。また、グループで対話している学生たちの対話の録音や気づきを記述したノートの変容も重要な振り返りのための証拠である。

以上のように、授業観察の記録のとり方の工夫を概説してきた。授業研究は、教師としての力量を高めるための協同的な学びの機会である。それを実りあるものにするためにも、観察者は、授業者と学生のために授業の多様な記録を取りながら、明日の授業改善、そして学生の成長のために誠実な姿勢を持って観察することが重要なのである。

ステップ4 事後協議会を行う

■ キー・ポイント

- (1) 研究授業が終わったら、早めに事後協議会を開催しよう。
- (2) 事後協議会の成否は司会者しだい。司会者は、はじめのうちは、仲間内で信頼・信望の篤い人をお願いするのもよいアイデア。
- (3) 授業者は、観察者にむけて、あらためて授業の目標と研究上の意図を説明しよう。
- (4) 授業者は、まず授業の目標の達成という視点から、自らの実践を振り返ろう。

解説 事後協議会の目的と展開

事後協議会の目的は、授業者の授業をより改善する、観察者が自身の授業改善に示唆を得る、ひいては各自の授業改善を通じて学生の資質能力を向上させる、の3点である。協議会では研究授業をより改善するために、議論を通じ授業者・観察者が共に知恵を絞ることを目指す。その展開の基本は次の順番になる。

- ① 授業で起こった事実を授業者と観察者間で確認する（キー・ポイント3～6）。
- ② 授業者が設定した授業の目的に基づいて、授業改善の仕方を考える（同7, 8）。
- ③ 観察者の問題関心に基づいて、授業改善の仕方を考える（同7, 8）。

なお、研究授業の目的に応じて次を加える。

- ④ 研究のビジョンに基づいて、研究授業からの示唆を確認・共有する（同9, 10）。

解説 振り返り（省察）とは

授業者は学習者の授業中の行動、発言内容、提出物などから、学びの状態を確認しながら授業の目標が達成できたかどうか振り返ることが必要である。さらに、授業を撮影した動画を見たり、観察者と協議を行う中で、自身の授業を客観視し、授業の問題点の原因や解決方法を探ることが重要である。また観察者も、授業者の授業、協議会などから必然的に自身の授業実践を振り返ることになる。こうした流れの中で、授業をさらに改善する方法を相互に提案しあうことが望ましい。



授業の良かった点や改善点を分類する：KJ法

- (5) 観察者は、初めから授業を否定するのではなく、授業の目標の達成という視点から成果や課題を指摘しよう。
- (6) 成果や課題を指摘するときは、授業記録に即して具体的な根拠（エビデンス）を示して述べよう。
- (7) 課題を指摘するときは、できれば代案の提案とセットでね。
- (8) 代案を提案するときは、まずは授業者の目標に寄り添って。次により高次な目標を目指して。
- (9) 課題と代案が確認・共有できたら、次に、研究上の意図からみた研究授業の成果や意義を議論しよう。
- (10) 最後に司会者は、事後協議会での議論が私たちの授業改善に示唆する点を、3つ程度にまとめよう。



授業の時系列に即した表を活用しての協議の様子

解説 司会者の役割

協議会の進行を担う司会者の役割は、とても重要である。司会者は単なるタイムキーパーではない。協議会では、時間配分に加えて議論の方向性を決めるのは司会者であり、授業者自身の振り返り、観察者からのコメントなど、それぞれの場面で参加者から意見を引き出し、内容の濃い議論をさせ、そしてその成果を授業者や観察者に分かりやすい形で還元する、これらの全てが司会者の力にかかっているといっても過言ではない。

協議会は、授業者や観察者にとって非常に緊張する場面である。これを成功させるには、司会者はまず、協議会を互いに何でも言い合える和やかな雰囲気にするのを心がける必要がある。それには、協議会の始めに司会者がジョークを言うのも一つの方法であろう。また司会者は、観察者のコメントに、授業の良かった点と改善点の両方を求めることを忘れてはならない。授業者と観察者が互いに敬意をはらい、相手を傷つけたり言い争いになったりしないよう、要所所で適宜フォローをする必要がある。授業者の授業に対する姿勢や工夫を観察者に理解させたり、授業の良かった点について、授業者に着想の経緯を説明してもらったり、あるいは観察者に、どうしたらそのような発想ができるのかを考えさせることも、議論の進め方としては有効である。

協議会の終了後には、たとえば、茶話会や簡単なパーティーなど、授業者の労をねぎらうとともに、授業者と観察者、あるいは観察者どうしが直接本音で話をする機会を設けることがある。お互いが打ち解け合えるような場面を設定することで信頼関係が深まり、その後の授業研究にも良い影響を与えることが期待できる。

コラム

コメントするのは難しい！ — 議論の作法 —

授業研究の事後協議会は、よりよい授業づくりと授業実践の創造を目指し、授業研究に参加した者が協働して学び合う場である。この認識を事後協議会の参加者がしっかりと共有して初めて、協議会でのコメントが建設的な意味を持ち、授業研究が有意義なものとなる。しかし、協議会でコメントしたり議論したりすることは、よく考えてみると「言うは易く行うは難し」である。

まず、授業者が構想・実践した授業には、授業の改善や新たな授業の創造につながる数多くの手がかかりが存在する。それらの中から、授業の成果や課題の本質に迫る上で欠かすことのできないポイントとなるものを見出し、コメントしていくことが重要である。そのポイントをつかみ、具体的な事実や情報や考察などを交えながら議論していくことによって、授業実践を客観的、多面的、総合的に理解したり、解釈したり、よりよい授業づくりや授業実践を探ったりしていくことが可能となる。

一方で、授業者は、授業目標の達成を目指し、刻々と展開していく授業の実際に身を置き、その時・その場・その状況で様々な判断や意思決定を行い、授業を実践していかなければならない。観察者であれば、授業中に、ある場面の指導の在り方について、時間の経過を気にすることなく、じっくりと思考をめぐらせることができる。しかし、授業者にはそれは許されない。そのような条件の中で授業者が行った判断や意思決定とその背景や根拠、授業者の思いや考え、授業者が見出した課題などは、授業者による省察において大切な内容であり、事後協議会でも重要な意味を持つ。そうした授業者の省察をしっかりと受け止め、理解し、共有していくことは、授業に関する学び合いのために授業を公開してくれたことに対する授業者への感謝と敬意を表するという意味でも、コメントする者に求められる。

さて、よりよい授業の構想・実践の創造を目指して、授業の成果や課題、さらには課題の改善策や代替案を考え、検討していくことが、事後協議会の要である。その際、授業の目標が変われば授業そのものが変わることになるのだから、協議会でのコメントは授業者の設定していた目標や協議会における協議の柱に即して行うことが基本である。しかし、協議会の参加者全員がまったく同じ授業観や教授知識などを持っているということはあり得ないので、授業プランや実践された授業に対しては様々な見方や考えが生じる。それでも、この基本を外してはならない。さらに、授業プランと実際に実践された授業との齟齬をただ単にチェックするだけのコメントでは、授業の改善には結びつきにくい。授業プラン通りに授業が実践されなかった場合でも、授業プランはあくまで「プラン」である。したがって、そのような場合は、授業者がどのような考えや思いで当初のプランとは異なる指導を行うことにしたのかといったことなどを、授業者に尋ねたり確認したりした上で、コメントすることが大切である。

その上で、授業者の授業構想や具体的な指導はどのような点で効果的であったのか、どのような点で課題があったのかについて検討していく。また、課題があったのであれば、どのような改善策や代替案がありうるのかについても検討していく。そこでは、参加者それぞれが、自分が持っている教授や学習に関する理論的、経験的な知識を総動員しながら、考え、意見を出し合い、共有し、理解を深めていくことが求められる。その際、実践された授業での授業者の指導や手立て、学習者の言動や活動などに係わる具体的な事実を踏まえながら、建設的に考え、コメントし、議論していくように努めたい。そうした検討を通して、当初の授業プランで設定されていた目標を越えた、より高次の目標設定の可能性（学習者の学びの可能性）が見出されたり、新たな授業開発に繋がるようなアイデアが考案されたりしていく場合がある。こうなると、協議会の成果は一段と大きなものとなる。

このような実り多い授業研究や協議会の実現を可能にする要件は、何だろうか。それは、何と云っても、まずは参加者それぞれが授業づくりや授業実践について何かを学びたい、よりよい授業を創造していきたい、自分の授業力量を高めたい、といった意志や意欲を持つことである。そして、その意味では常に参加者全員が「当事者」として授業研究に係わり、他者のコメントにも謙虚に耳を傾けながら、自分自身の授業観や教授知識などを省察し続けることである。

このように考えてくると、協議会でコメントしたり議論したりするということには、授業を観察する力も含め、それ相応の能力や見識、作法や態度、意識や意欲が求められることがわかる。それ故に「言うは易く行うは難し」である。しかし同時に、そうであるからこそ、これは、絶えず向上させていきたい教師の大切な力量の一つであると理解しておきたい。まずは一步を踏み出してみよう。そして、その一步から学んでいこう。

コラム

多様な事後協議会のあり方と司会者の役割

協議会は、授業研究のテーマ、司会者の進行法、参加者の技量などにより様々な形式をとるが、大きく二つのスタイルに分けることができる。一つは、授業者とフロアの参加者が対面して質疑応答や議論を行う形式で進めるもの、もう一つは、フロアの参加者がグループに分かれて、提示されたテーマに沿ってグループ内で協議した後、全体で協議内容を共有するものである。前者は、議論の進行が全体で共有しやすい一方、全員の意見を協議会に反映させにくいこともある。後者は各グループが「ミニ協議会」であり、そこでは自由に意見を交換することもあるし、表や付箋を使って意見を集約していく、いわばワークショップ的なものとなることもある。これは全員が議論に参加しやすいが、グループによって議論の内容が異なる場合があるため、グループワークの間は、司会者は各グループを回りながら内容を把握したり、議論が進んでいないようであれば助言を与えたりする必要がある。協議会では、これらのスタイルのどちらか一方だけで進めることに固執するのではなく、必要に応じて組み合わせて行うのが望ましい。

協議会の時間は限られている。したがって、司会者が論点を整理して示し、それについて議論するのが一般的である。議論の糸口を提供したり収束させたりすることで、効率的かつ効果的な協議会となる。議論を深めるには、司会者の主導により協議会に方向性を持たせ、それを維持することが特に重要である。参加者と方向性を確認し合いながら進め、議論の方向性がずれてきたら早い段階で修正する必要がある。しかし協議会を進める中で、より議論が深まりそうな方向性が新たに見つかった場合、そちらへ議論を誘導することも大切である。たとえば、ある特定の改善点に着目し、それに対する多様な改善策をフロアから引き出し、さらにそれら改善策を論点に議論を進めて行くような場合である。司会者の臨機応変な対応により、一貫したテーマを持たせつつ、協議会を多様な議論の場とすることができる。議論をまとめる際は、論点を幾つかのカテゴリーに大別した上で、出された意見を引用しながら要約すると、わかりやすく、授業者や観察者にも、その内容がよく伝わるであろう。

協議会における司会者の主要な役割は、授業を題材とした協議会の論点について参加者全員に理解させること、協議会の方向性を制御しながら参加者から多くの発言を引き出すこと、そして参加者全員に協議会の成果を共有させることである。したがって協議会では、観察者を通じて授業者に何を伝えるか、また、授業者を通じて観察者に何を伝えるか、について司会者自身が明確な意図を持っておかななくてはならない。そのためには、司会者は授業のカリキュラムにおける位置付け、授業者の意図や工夫について事前に把握しておくべきである。つまり司会者には、授業内容や教材、授業の方法についての理解が求められ、同様な内容の授業の先行事例に関する知識も必要とされる。これらが、協議会の進め方や議論の掘り下げ方のヒントにもなる。協議会そのものは授業者の改善点の指摘だけに終始するものではない。授業者の改善点は、そのまま各自の授業を振り返る視点にもなり、参加者の意見や授業者のよい点に気づかせ、それを全員で共有することで各自の授業の改善に役立てられるようなものでなくてはならない。

司会者は、可能であれば授業研究の経験者が望ましい。それは、授業者、観察者双方の立場を理解しているからである。司会者を授業研究のメンバーで交代して担当するのもよい。普段から意見交換できる仲間であれば、司会者は比較的容易に協議会を進行できるであろう。ただし、協議会のときには適度な緊張感があつた方がよい。「親しき中にも礼儀あり」という日本のことわざがあるように、司会者には、リラックスした雰囲気と緊張感のバランスを取りながら協議会を進めることが求められる。経験を積んだ司会者は、授業者や観察者の力を読み取る観察力と分析力を持っている。授業の間では、授業計画と授業実践の一貫性、授業の目標と内容の整合性、授業の方法や教材の適切性など、授業に対する多様な視点からの分析（これらは観察者にも求められるが）、そして協議会では、発言内容の理解に加え、観察者の発言が授業を分析的に観察した結果のものかどうかの判断を行い、協議会の進行に生かしているのである。

ステップ5 自分の授業を見直し、改善していく

■ キー・ポイント

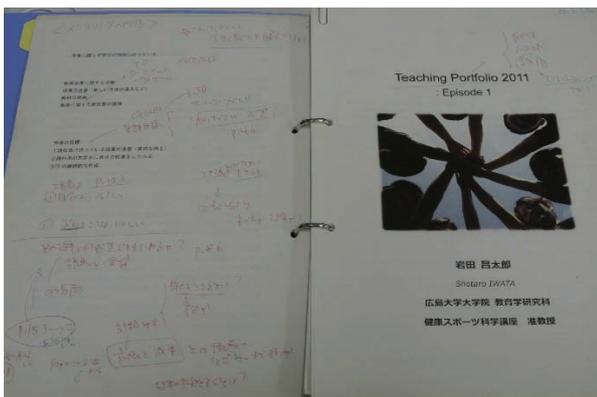
- (1) 観察者と授業者は、事後協議会の成果を踏まえて、それぞれ個人で普段の授業を省察しよう。
- (2) 明日の授業に活かせる「技」を見つけて、実際にトライしてみよう。
- (3) 半年以内に身につけたい高度な「技」を見つけて、箇条書きしておこう。
- (4) 一年以内に取り入れたい斬新な「思想・理念」を見つけて、メモしておこう。
- (5) 実際にトライした成果やこれからトライしたいことを、仲間に伝えよう。
- (6) 仲間に伝えたことをメモに残しておこう。SNS等を使って発信しよう。

解説 普段の授業の省察 —「技」と「思想・理念」に即して—

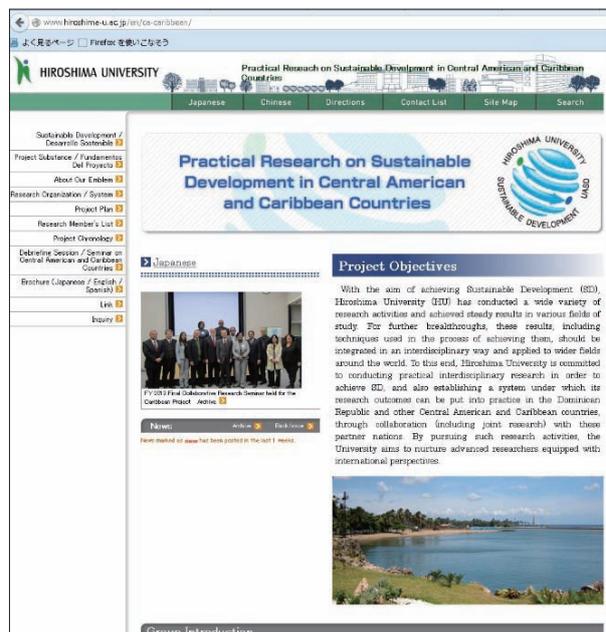
授業研究では、授業者だけでなく観察者も学ぶことが期待される。授業についてのコメントは授業者にとって役に立つ。また、観察者にとっては、まねをすることが学びの第一歩である。ただし、人の行動には、常にまねができる部分とできない部分があることに注意しなければならない。

たとえば、教師によるハウツーは見えやすくまねがしやすいだろう。よって、普段の授業において、その効果を試すことができる。しかし、そのハウツーは、その教師による、教育についての哲学に支えられていることに注意しなければならない。「なぜ、そのような行動をしたのか」を問うことによって、その人の哲学を知るように努めるべきである。

哲学は、それぞれの教師がつくるものである。ある人の哲学に、共感ができるかもしれないが、まねをするべきものではない。教育について、授業について、教科について、授業の実践や観察を通して、あなた自身が反省しなければならない。哲学はコツコツと作っていくものだから、普段の授業の省察において、授業について考えたり議論したりすることを大切にすべきである。



ティーチング・ポートフォリオによる振り返り



ホームページの活用

ステップ6 授業研究の仲間を増やし、広げる

■ キー・ポイント

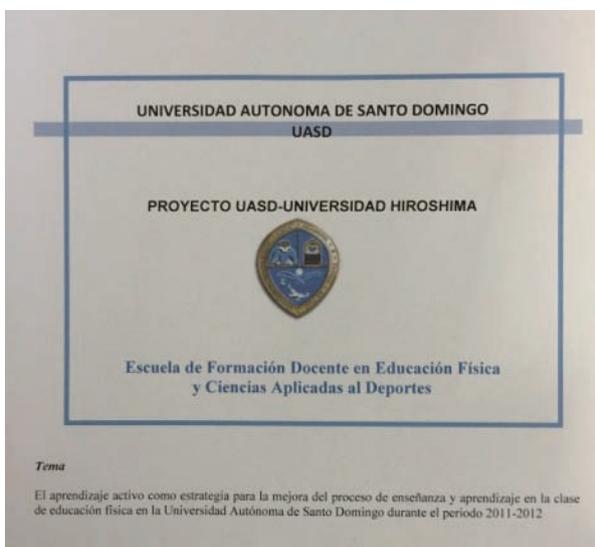
- (1) 授業改善の成果は積極的に宣伝しよう。そのために研究成果を印刷物にまとめよう。印刷しなくてもウェブ上にアップして広く読んでもらおう。
- (2) 口頭や印刷物や SNS 等で授業改善の喜びを他者に伝え、授業研究の仲間を増やそう。
- (3) 取り組みの成果を論文にして発表するのもいいアイデア。

解説 授業研究報告書を作成する

授業研究を実施した後にそれを報告書としてまとめておくことは、授業研究を振り返り、その成果を今後につなげていくためにも大変重要なことである。報告書としてまとめるには、実施された授業の概要（テーマ、日時、受講者の状況等）を整理した上で、教師がどのようなテーマ、目標を持って授業準備をしてきたのか（事前検討会の内容も含む）等を整理しておく必要がある。さらには事後協議会で議論された内容や、専門家からのコメントなどがあれば、その概要も整理しておくことよいだろう。もちろん、授業プランもつけておくことも必要である。

解説 研究・実践論文を作成する

授業研究の成果を研究・実践論文にまとめて、学会や学術誌などで発表することは、教育研究者としてやり甲斐のあることである。研究・実践論文としては、授業研究の集団としての実践記録を中心にしたもの、自己の実践のアクション・リサーチの成果、他者の実践の批判的分析・検討の結果などが考えられる。こうした研究・実践論文を作成し発表することによって、授業研究の成果と課題が共有され、授業研究が益々活発に行われるであろう。そして、授業研究が教育実践研究の一つの領域になると期待される。



サントドミンゴ自治大学体育スポーツ教員養成科で作成したアクションプラン



世界授業研究学会大会のプログラム及び発表要旨

コラム

多様な事後協議会のあり方と司会者の役割

各自がそれぞれの仕事をかかえ、多忙を極める日常の中で、授業研究の時間を作り出すことはたやすくはない。しかし、忙しさを理由に話し合いの時間を確保しなければ、授業研究は進まない。そこで、授業研究を進めるポイントと授業研究の時間を作るいくつかの方法を紹介する。

<授業研究を進めるポイント>

授業研究を計画的・継続的に進めるポイントは、(a) 教師全員が「授業研究の意味や価値」を十分に理解し、その必要性を認識したうえで始めること、(b) できるだけ負担の少ない形で始め、徐々に回数を増やしたり、内容を深めたりしていくこと、である。

<授業研究の時間を作る方法>

① まず、思いついたときに：メール・SNSを利用する

グループや教師全体で集まる時間を確保するのは簡単ではないため、まずはメールやSNSを利用する方法がある。初めから無理な時間設定をすると、長続きしないが、この方法であれば時間を拘束されることなく、授業プランや教材、指導法などについて自由に意見交流することができる。しかし、メールやSNSは便利な反面、それらの利用だけで議論を深めることは難しい。

② 気楽にやってみる：他の会議とセットにする

メールやSNSで授業の話をしていると、少し時間をとって意見交流してみたいくなる。そのときは、気楽に他の会議とセットにする方法がある。例えば、会議終了後の「10分だけ」授業研究の時間とし、グループで話し合いをもったり、教師全体の意見交流の場としたりするのである。会議終了後の10分であれば、授業研究のためだけにあえて集まる必要もなく、また時間的な負担も少なく済む。つまり、気楽に、そして継続的に研究を進めることができる。

③ 機が熟したら：「授業研究日」を設定する

10分だけの授業研究を続けていると、もっと時間を取って意見交流したくなる。そのときは、「2週間に1回は授業研究日をもつ」「セメスターに3回は授業研究日をもつ」などのルールを決め、授業研究を進める方法がある。授業研究を習慣化するためには、少し無理をしても、その日は必ずグループまたは教師全員が集まり、話し合いを行うのがよい。その際、②と同様に、たとえ10分でも全員が集まり、教材を持ち寄ったり、普段の授業の交流を行ったりすることが重要である。

これまで紹介した①～③の方法は、あくまで例であり、工夫次第で他にもいろいろな方法が考えられる。いずれにしても、授業研究は、計画的・継続的に進めることが最も効果的といえる。

4. おわりに

2010年、広島大学大学院教育学研究科にドミニカ共和国のサントドミンゴ自治大学から協力要請があった。人文科学部に属していた教育学科が独立し、教育科学部が新設されたのを契機に、この新しい組織へのサポートが求められたのであった。これに応えるために私たちが着目したのが、「授業研究」である。同時に、ドミニカ共和国には子どもの学力の向上が大きな課題となっており、より高度な教師教育を提供することによって、優れた教師が育ち、彼ら彼女らが優れた授業を行うことで、子どもたちの学力の向上が図れるのではないかと考えた。

まずは、教科毎に少人数の授業研究チームが編成された。私たちはワークショップ等を通じて授業研究の方法をお伝えした。実際、同僚と授業を磨くことで、授業が改善されるとともに、親密な組織が作られた。さらにこの活動を拡大するために、未経験者にもわかりやすいテキストがほしいとの要望が寄せられた。それで作成にとりかかったのが本マニュアルであった。

日本の教師教育に携わっていると、授業研究が多くの暗黙の前提の上に成り立っていることに気づかない。しかし、授業研究を海外で使ってもらおうとすると、この文化的前提が大きな障壁となりやすい。そこで、本マニュアルの作成にあたり、授業研究の文化的特性をできるだけ削除し、単純化して取り組みやすいものとなるよう心がけた。ただ、それだけに授業研究の厚みをそぎ落とさざるをえなかった。単純化の作業はかなりの苦痛を伴った。授業や授業研究に対する見方や考え方は、ときに各執筆者の教師としての生き様を反映し矜持ともなっていたからだ。本マニュアルが、授業研究の本質と文化的特性の間で、国際版入門マニュアルとしてのバランスを欠いているとすれば、ご指摘いただきたい。国際的な実践で使用されていく中でフィードバックを受けて、改訂していきたい。

授業研究を受容する側にとっても、授業を同僚に公開し、しばしば批判にさらされるという経験は苦しいものである。ドミニカ共和国でのプロジェクトでも、実際のところ本マニュアルのとおりステップを刻んだわけではなかった。その受容プロセスは単線的ではなかった。制度的前提がまったく異なることも多かった。各国や地域における歴史や文化の多様性を思えば、受容に抵抗を示されることもあるだろうし、変容を伴うのが自然である。

授業研究は一つの活動であり、やりながら学んでもらう手法である。まずは、始めることができなければ、その意義も理解してもらえないし、その進め方も習得してもらえない。本マニュアルにより、授業研究をやり始めてもらうことで、初めて見えてくるものがたくさんあるはずである。本マニュアルは、その一段高いところに上ってもらうための梯子の役割しかもっていない。登り終えたとき、投げ棄てられるべき梯子である。授業研究をやり始めることができたとき、本マニュアルの不十分さもまた見えてくるであろう。

一段高いところに上ったら、本マニュアルは横に置き、更なる授業の高みを目指してほしい。そこにマニュアルはない。指針となるのは、常に目の前にいる学習者一人ひとりの姿、あなたの内なる思想・理念、学びあう同僚である。皆で、よりよい教育を探究していこう。

5. よくある Q&A

授業研究全般

Q1 どのくらいの頻度で授業研究のサイクルを回したらいいですか。

A1 授授業研究には決まった頻度というのはありません。参加するメンバーの都合に合わせて、無理のない頻度で行えばよいのです。たとえば、毎年、新しいメンバーを迎えるタイミングで行うとか、年1回の定期的な研究発表会を立ち上げて、その発表のためにいくつかのグループが、各々、授業研究をして持ち寄るということをしても効果があると思います。

Q2 必ず授業を公開しなければなりませんか。

A2 授業研究の中核は、授業の具体的な事実に基づいて授業を検討することです。その授業をよりよいものに改善しようとする仲間達が、皆で授業を見ることが大切です。授業の公開は、授業研究で最も重要なステップとなります。授業の公開は、参加者たちの予定が合わず、全員がナマで観察できない場合は、授業を録画しておいて、あとでそれを見るという形でも、それなりの効果はあります。どのような形でも「授業を見る」というのは重要なステップです。

Q3 授業研究そのものが時間がかかりすぎて、面倒だと思える教師が多くいます。どのように説得したらいいですか。

A3 確かに授業研究に参加すれば、それなりの時間がかかります。しかし、そこでかかった時間以上の成果を得られます。また、参加者達が要領をつかんで、研究会がスムーズに進むようになれば、苦痛になるほどの時間を要するものではありません。そして、まずはできるだけ時間を使わずに授業研究を行える工夫をして、参加に消極的な教師も仲間に入りやすい環境を作りましょう。A9で回答しているように、授業研究は常にステップ1からステップ6まですべてを行わなければならないことはありません。授業研究の中核となる研究授業の観察をするにも、参加者全員のスケジュールを調整するのが難しいかもしれません。A2で述べましたように、そのような場合、次善の策として、研究授業を観察できない方は、その授業をビデオに録画したものを都合のよいときに一人で見るという方策もあります。

Q4 授業研究を実施するにあたって謝金など現実的なインセンティブがないと参加する教師が見込めません。日本では無報酬でやっていると聞きますが、私の国では困難です。

A4 授業研究は、他人に命じられて行う仕事ではありません。慈善事業でもありません。自分のために行うものです。授業研究に参加することにより、自分自身の授業構想力、授業実践力、授業分析力そして教師教育の指導力が向上するという達成感が大切です。国情により、仮にインセンティブを用意するのであれば、授業研究に参加することに対してではなく、よい授業が出来るようになることに対してということにするべきでしょう。そうすれば、よい授業が出来るようになりたいという気持ちが、授業研究への関心や参加につながるでしょう。

Q 5 どのくらい授業研究を行えば、現実の授業は改善されますか。効果はどのように目に見えますか。

A 5 授業研究を何回経験すれば現実の授業が改善されるかは、個人差がありますし、その授業研究がどのように行われたかにもよります。一般的には、授業研究を繰り返し経験すると、それだけ効果は高まりますが、たとえ一回でも経験すると、授業づくりへの姿勢が変わります。授業研究を経験すると、授業を作る手順と留意点が明確になり、目標の設定、教材の選択とその組織化、授業を受ける子どもや学生の反応の予測・対応、発問内容とその構造化など、授業づくりのポイントで何をするかについての戸惑いがなくなり、授業への自信が確実に深まります。

組織作り

Q 6 グループがなかなか作れません。どうすればいいですか。

A 6 まずは、少人数でもよいので、授業研究に関心を持っている教師や経験のある教師でグループを作って始めるのがよいでしょう。授業研究をよく知らない教師の中には、様々な理由で参加に不安を持っている場合が多いです。実際に授業研究を行っているグループの活動に、参観だけでもしてみませんかと誘い、どのような活動なのかを見ていただくことによって不安が解消されれば、その中から本格的に参加して下さる教師も現れるのではないかと思います。

事前協議会

Q 7 授業プランをメンバーで検討する意義はなんですか。一人で作っては駄目なのですか。

A 7 一人で作るのでは駄目だということではありません。しかし、よい授業ということに対する考え方は、様々です。メンバーで検討すると、様々な視点からの意見交換が出来ますので、ひとりで作るよりも適切な人数で検討しながら作る方がよい授業が出来やすくなります。しかし、日常の授業は、授業者ひとりで作るのですから、授業研究の一環としてメンバーで作るときも、あくまで他人任せにならないように、ひとりひとりが自分の授業として真剣に考えることが必要です。

Q 8 授業プランを良くすれば、授業は改善されるのでしょうか。よい授業プランが書ければ、よい授業ができますか。

A 8 よい授業プランが書けると言うことは、よい授業ができる必要条件であって、十分条件ではありません。よい授業プランが書けたからといって、必ずよい授業ができるというわけではありません。なぜなら、実際の子どもや学生を相手に行う授業には、机上の計画には盛り込めない様々な要素が入ってくるからです。教師の話し方、口調、タイミング、刻々と変わる子どもや学生の反応を見ながら臨機応変の対応をとることなどは、授業プランに表すことはできません。授業プランはあくまで授業の骨格で有り、構想です。しかし、その授業プランがよいものにならないければ、よい授業の前提が成り立ちません。

Q 9 そもそも忙しすぎて時間がありません。事前協議会を省略し授業観察だけではだめでしょうか。

A 9 事前協議会を省略できないことはありません。授業研究は、授業研究の組織作り、事前協議会から始まって、実施した授業の見直し、新たな仲間作りまでのすべてのステップを常に行わなければならないということではありません。もちろん、事前協議会の役割は大き

いので、できれば省略しないで欲しいと思います。しかし、授業プラン作成過程は授業者が一人で行い、その授業実践をグループで観察し、事後の検討を行うことだけでも大きな効果があります。常にすべてのステップを行おうと思うと、時間的余裕がなくなり、結局、授業研究をしなくなってしまう恐れもあります。できるところから行い、習慣化していくのがよいでしょう。

研究授業

Q10 授業の公開に同意してくれる教師がいません。学生による教育実習での授業を使って授業研究をしたいのですが。

A10 教育実習の授業を使って授業研究をしても効果はあります。授業の公開に同意する教師がいなければ、まずは教育実習の授業を使うということも一つの方法です。教育実習の授業研究に参加することを通して、授業研究に慣れ親しんでいくことにより、徐々に、お互いに自分の授業を題材にして授業研究することに抵抗感がなくなって、授業の公開がスムーズに行くようになることを期待したいです。

Q11 事前に授業プランを観察者全員に配布しなければいけませんか。手間暇がかかるので省略したいです。

A11 授業観察は、授業プランを知って観察するのと知らずに観察するのでは、観察する授業に対する理解に大きな差が出ます。観察者が予め授業プランを知っていれば、一つ一つの活動の意図や意味がよくわかりますし、授業全体の構造などもよくわかります。観察者全員に授業プランを配布することは、その授業観察の意義を高めるためにとっても有効なので、是非実施したいことです。しかし、授業を受ける子ども・学生は授業プランを持たずに授業を受けています。やむを得ず授業プランを配布できないときには、観察は、授業を受けている子ども・学生の目線で行うと決めて実施するということが可能です。

事後協議会

Q12 授業のすぐ後で事後協議会をしなければいけませんか。

A12 すぐ後でも、時間をおいてからでもよいです。事後協議会には、授業評価・検討のための資料が必要です。それらの準備のために時間が必要なときは、ある程度時間をおいた方がよいでしょう。できるだけ、その日のうちに行うのがよいです。

Q13 そもそも事後協議会をしなければならないのでしょうか。事後協議会をするとどのような効果があるのでしょうか。

A13 事後協議会の役割は、共有－省察－改善にあります。事後協議会で研究授業のねらい、実際、優れた点、課題を教師同士が共有することにより、教師同士の省察が効果的に進められ、質の高い改善ができます。

Q14 事後協議会と授業の評価は違うのでしょうか。なぜ授業者を評価してはいけないのでしょうか。

A14 事後協議会では、研究授業で提案された内容について検討します。授業者の提案に敬意を表し、まず提案の趣旨を理解するように努めましょう。提案の趣旨には、教材研究、授業の課題、改善への方向性などが含まれています。それらを事後協議会で共有することで、授業者以外の教師も、授業者が行ったことを追体験でき、授業改善力を向上させることにつながります。授業者を評価しては、授業者以外の教師の授業力の向上につながりま

せん。大切なことは、授業の評価を通して授業改善をすることです。事後協議会では、授業者への評価ではなく、提案への評価を行います。

Q15 撮影したビデオはどのように活用できますか。

A15 事後協議会で使う場合は、検討する内容や場面の確認に使うとよいでしょう。発問はどうだったか、学生はどう応えたか、確認しましょう。授業者個人が使う場合は、自分のイメージとずれがないか、授業プラン通り進められたか確認し、次回の授業に反省点を活かすようにしましょう。

Q16 研究授業の後日に事後協議会をしてはいけませんか。その際に撮影したビデオがなければならぬでしょうか。

A16 どうしても後日に事後協議会をする場合は、研究授業の再現と共有を図る必要があります。ビデオがあればやりやすいです。ない場合は、授業観察記録を速記でとり、コピーを配布して再現しましょう。板書の写真も再現に役立ちます。

省察（個人と集団）

Q17 実践の振り返りとは、具体的にどうしたらいいのかわかりません。

A17 実践の振り返りとは、自分が日常的に行っている授業実践を、客観的に見つめ、改善のための示唆を得ることです。自分で自分の授業を振り返るのは難しいことです。簡単な方法から始めましょう。それは、他の教師に自分の授業を見てもらって、評価してもらうことです。複数の教師とグループを作って、お互いに授業を見せ合うようにするとよいでしょう。自分では気づかなかったよい点や課題が見つかり、振り返りの視点を身につけていくことができます。

Q18 振り返りたくとも時間がないんです。

A18 時間があったら振り返りをしようと思っても、なかなか時間はとれません。あらかじめ授業を公開する日を決めておき、その日に複数の教師に授業を見てもらうようにしましょう。事後協議会を行う時間がないときは、その場で複数の教師から評価してもらい、自分のコメントや感想を伝え、授業改善の視点を交流するようにしましょう。少しずつ積み上げていくことで、自分で自分の授業を振り返る力がついていきます。

授業研究を広げる

Q19 所属先（本務校や学部など）は何も支援してくれません。せめて場所の提供やコピー代、報告書作成費は補助してほしいです。

A19 成果が出るまでには時間がかかります。粘り強く熱心に授業研究に取り組むことで、教師のモラルや学生の資質能力が向上すれば、支援も得られやすくなるでしょう。授業研究の輪を広げて、少しずつ理解や支援が得られるように働きかけていきましょう。

執筆者（広島大学大学院教育学研究科・所属講座等）及び分担（執筆順）

※所属は2015年当時のものです

岡村美由規（社会認識教育学）

第1章，第3章ステップ及びキー・ポイント，ステップ4，第5章Q

木村 博一（初等カリキュラム開発）

第2章前半，第3章ステップ1

棚橋 健治（社会認識教育学）

第2章後半，第5章A 1～1 1

草原 和博（社会認識教育学）

第3章ステップ及びキー・ポイント，ステップ1

吉田 成章（教育学）

第3章ステップ及びキー・ポイント，ステップ3コラム

丸山 恭司（教育学）

第3章ステップ1，第4章

小山 正孝（数学教育学）

第3章ステップ2，ステップ6

鈴木由美子（学習開発学）

第3章ステップ2，第5章A 1 2～1 9

木下 博義（自然システム教育学）

第3章ステップ2，ステップ6コラム

桑山 尚司（留学生専門教育）

第3章ステップ2コラム，第4章

山崎 敬人（初等カリキュラム開発）

第3章ステップ3解説，ステップ4コラム

影山 和也（数学教育学）

第3章ステップ3，ステップ5

岩田昌太郎（健康スポーツ科学）

第3章ステップ3コラム，

齊藤 一彦（健康スポーツ科学）

第3章ステップ4，ステップ6

竹下 俊治（自然システム教育学）

第3章ステップ4，コラム

日本語版

監修

丸山 恭司・草原 和博・吉田 成章・岡村美由規・桑山 尚司

構成・編集

岡村美由規

英語版

翻訳者（所属等）

Crimson Interactive Pvt. Ltd. (Ulatus, www.ulatus.jp) 英語版翻訳・編集

スペイン語版

翻訳者（所属等）

島崎 マリ（フリーランス通訳・翻訳者，ドミニカ共和国公証通訳人） スペイン語版翻訳

岡村美由規（広島大学大学院教育学研究科） スペイン語版翻訳・監修

Francisco Alfaro（中京大学国際教養学部） スペイン語版校正

久我 アレキサンデル（名古屋経済大学人間生活科学部） スペイン語版翻訳

EVRI研究プロジェクト叢書Vol.2 教師教育者のための国際版授業研究マニュアル

発行日	2020年6月 (原版2015年3月)
編集	広島大学教育ビジョン研究センター (EVRI) 〒739-8524 東広島市鏡山1丁目1番1号 広島大学大学院人間社会科学研究科 B101 Tel&Fax: 082-424-5265
デザイン	株式会社ニシキプリント 宮本 勇一 (広島大学教育ビジョン研究センター (EVRI))



**EDUCATIONAL
VISION
RESEARCH
INSTITUTE**